

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健

18

イラン文化と敦煌

イラン人・タジク人の目線

今回の旅は、シルクロード上で「汎ユーラシアのイラン文化」を探るのが目的である。イラン・中央アジアを経て、いよいよ漢民族居住地帯である甘肅省敦煌へ足を踏み入れるに当たっては、イラン人・タジク人目線の観察を心掛け彼らが持っていたであろう漢民族への違和感を基調に据えなくてはならない。その違和感とは、無論、現代の日本人である筆者が「一から習得する術は無い。しかし、イラン研究者たるの感受性によって、その万分の一くらいは再現できるのではないかと考えている。

出会ったイラン人・タジク人にそういった心理状態があること自体は事実なので、その根源を確かめねばならぬ。筆者の個人的経験から、それを推測する手掛かりを幾つか挙げてみよう。

ドイツの大学院で教育を受けたイラン人との会話の中で、この気遣いがエスカレートした挙句、「日本人は中国人やトルコ人やモンゴル人とは違います。そもそも黄色人種ではありません」との断言を聞いたことがある。こうなると、流石にどう返答したものかと四苦八苦せざるを得ない。折角の気遣いを無碍にする訳にもいかず、ざりとして事実に対する発言を容認する訳にもいかない。ただ、極論化したお陰で、その裏にある発想も透けて見えてきた。即ち、「白人—イラン人は彼らの観点においては白人である—が最上等で、黄色人種は劣った存在である」との暗黙の前提である。結局、この遣り取りは、「日本語はトルコ語やモンゴル語と同じ膠着語である」と返答して押し切ったのだが、相手は大層不満そうであった。洗練されたお世辞文化が栄えるペルシア語圏でこんな受け答えをした以上、「高度な気遣いを受け取らない野蛮人」と思われるのは覚悟の上である。

例えば、イラン人・タジク人との会話の中では、「中国人(イラン系ペルシア語でチーニ、タジク系ペルシア語でキタイスキ)と日本人(イラン系ペルシア語でジャーパーニー、タジク系ペルシア語でヤポンスキー)は直ぐ見分けが付きませぬ」とのフレーズが頻出する。これが何を意味しているのか、筆者には当初見当が付きかねた。しかし、暫くして了解した限りでは、これは彼らに特有の繊細且つ婉曲なお世辞—あるいは筆者に対する救済の辞—なのである。つまり、そこまで中国人に対する評価が低く、それが言わずもがなの前提になった上で、「貴

別の事例としては、タジク人が断固として「犬を食べる中国人は許せない」と語っていた記憶がある。何度も繰り返していたので、彼らとしては頗る重要な論点らしかった。これには二通りの解釈が可能である。有り得べき第一の解釈では、犬を尊重するあまりの発言と捉え得る。即ち、タジク文化の基調にあるゾロアスター教では犬は神聖な動物とされ、これを食べるなど言語道断の振る舞いである。この宗教感情の背景には、牧畜生活を営んでいた先祖が、犬を益畜としてこよなく愛好していた伝統がある。ついに、犬と云う古代イラン語「サカ」を以て部族名に採用する一団—サカ族(ギリシア語でスキタイ族)—まで出現するに至っており、彼らからすれば、自らの部族のトーテムたる犬を食用に供するとは、考えられぬ事態なのであった。ちょうど中国史上で、犬を益畜として使役する魏晋南北朝時代の北方遊牧民が、犬を食べる(当時の)漢民族に対して抜き難い不信感を抱いたとされるのと同様である。第二の解釈では、犬を不浄視するあまりの発言とも考え得る。現代のタジク人はイスラーム教徒である。而して、イスラーム法に於いては、犬は豚と並ぶ穢れた動物であり、触ることさえ厭わしい。イラ

方はその(最低ランクの)中国人とは違いますよ」と気を遣ってくれているのである。

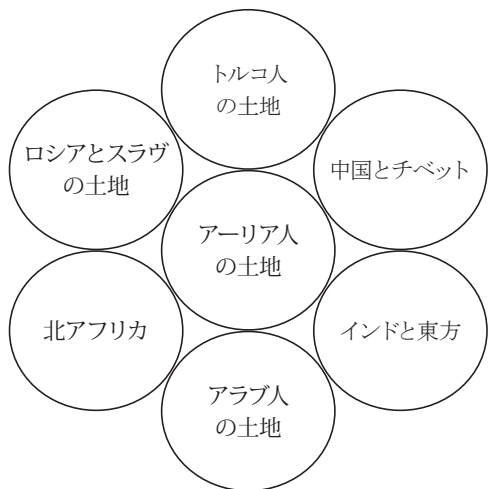
筆者はその前提を共有しておらず、この気遣いを理解するまでに随分と時間を要してしまつた。おまけにかなりの偏見が入り混じっているようで、有り難いのやら何やら、よく分からない。しかも、彼らが来日した際は、関西弁を話す集団を捉まえては「あの人たちは中国人だろう?」と尋ねていたのが、本人たちが自負しているほどには区別出来ていなさそうである。だが、その目線の当否はさておき、少なくとも筆者が

ンの伝統とは真つ向から対立するこのイスラーム法規定が、イラン・中央アジアでどの程度まで厳格に守られているのかは分からない。ただ、或るイラン人は、筆者に対して「可哀想な食用犬を中国から救い出し、ペットとして飼っている」として、その写真を見せてくれたことがある。この一例だけから結論を引き出す訳にはいかないが、イラン人・タジク人の場合、たとえイスラーム教徒であるにせよ、犬を尊重する民族感情が根底にあるケースの方が多いためであるまいか。なお、その「救出された食用犬」と一緒に映っていた証明書はハンゲル文字で書かれていたので、少なくともこの場合、中国人は濡れ衣を着せられていたとしか思えない。

イラン風の中華思想

このようなイラン人タジク人の漢民族への違和感とは、彼らの先祖の世界観から裏付けることが出来るかも知れない。下記が、古代イラン世界で一般的だった「七州の世界(ハフト・ケシュヴァル)」の図である。これによると、世界は七つの州で構成されており、その中央に

アリア民族―つまり現代のイラン人・タジク人の祖先―が住む州が鎮座する。これが人類発祥の地であり、残余の六つの州の人類は、中央州からアリア民族が移住することで成立した。「中国・チベット」は、東方にあるそのような州の一つに過ぎない。・・・このような神話的地理学を未だに信じているイラン人・タジク人がいるとは思えないが、ここにイラン・タジク風の中華思想の根源を看取できる。彼らにとっては、アリア民族の住まう土地こそが、世界の中心なのである。



図：古代イラン人の「七州の世界」

敦煌到着後、真つ先に筆者の違和感を喚起したのは、敦煌の食文化であった。それも、イラン人・タジク人視点と日本人視点の両方からである。イラン人・タジク人視点の方から説明するならば、とりあえず彼ら自身の食文化に触れてはならない。筆者が知る限り、内陸アジアの料理は調味料に乏しく、その結果として味付けが単調になりがちという弊害を有する。それでも、ほのかな酸味と若干の塩味は存在するのだが、辛さと云う概念は、多分無い。2004年12月に、スイースターン州ザヘダーンのレストランで「カレーライス」なるメニューを見付けて驚愕したことがあったのだが、出てきた料理はライスに唐辛子をバラバラと降りかけた代物だった。このイランの薄味食文化は、辛さが苦手な筆者にとっては幸運だったのだが、大半の日本人にとっては、災難と感ぜられるようである。その結果、「イランへの留学生は料理が上手くなって帰ってくる・・・何故なら、自分で作るしか無いから」と云う確乎たるジンクスが成立している。

この薄味傾向は、パミールを越えても、天山を越えても、基本的に維持されていた。食材―

但し、イラン風の中華思想は、漢民族の中華思想と或る重要な一点で異なっている。漢民族の中華思想は、四方の北狄・東夷・南蛮・西戎が漢民族文化に同化したら、多分そこで終わりである。しかし、イラン風の中華思想は血統原理が主柱になっており、「エーラーン（アリア民族）」と「アネーラーン（非アリア民族）」の区別は、かなり永続的である。結果として、相手の同化を寧ろ拒否する。少なくとも、大帝国の形成に成功したイラン高原のイラン人の方では、歴史上の一時期―サーサン朝・ペルシア帝国時代―にそのような発想が主流を占めた。中央アジアのタジク人の方は、そこまで強烈な自己主張はしていないようだ。

以上が前提である。日本人はしばしば漢民族の視点に立って、魏晉南北朝〜隋唐の「胡人」たちを、和製オリエンタリズムの対象として消費してきた。しかし、シルクロードを遥々やってきた「胡人」たちの視点に立てば、今度は中国の方が違った姿で見えてくる筈である。以下では、筆者が気付いた範囲内で、それらを点描していきたい。

羊肉や驢馬肉―と調味料に変化が無い以上、料理の味付けにも変化があらう筈がない。それが突如として、敦煌に入った途端に激辛料理に変わるのである。激辛敦煌料理が2000年の伝統を有すると仮定した場合（唐辛子が中国に伝わったのは17世紀だが、芥子は古くからあった）、香辛料と云うものに触れたことが無かったであろうイラン人やソグド人は、この付近で「中華料理」の洗礼を浴び、望郷の念を強くしたのではなからうか。まさかあの保守的なイラン人が、急激に中華料理に馴染むとも思えない。

これは、日本人視点でも意外であった。と云うのも、自然条件を鑑みるに、中国四大料理のうちで甘肅省まで拡大しているのは、粉食文化＋塩味文化に属する華北料理ではないかと推測していたのだが、これが見事に外れたのである。この辛さは、麻辣を基本とする四川料理の特徴で、果たして如何なる理由によって四川料理風の辛さが甘肅省まで浸透しているのかと考へざるを得なかった。何となれば、激辛料理とは、高温多湿地帯で食物の腐食を防ぐために発達したと云うのが筆者の理解だったのだが、甘肅省では、見たところその必要性は無さそうなのである。

敦煌料理の謎

トウルファン北駅を出発して、敦煌の「最寄り駅」である柳園南駅に降り立ったのは、2017年8月12日のことだった。20世紀にはトウルファンから敦煌まで列車で7時間半かかったそうだが、高速鉄道が開通してからの所要時間は3時間半に短縮された。郵善駅、哈密駅などといった通過駅の名称が、西域の旅情を誘う。

柳園南駅に降り立った瞬間から、漢民族地帯に足を踏み入れたと云う実感が湧いた・・・と書きたいところだが、実際には何もなかった。沙漠の中と云う自然条件自体は、イラン〜中央アジアと何ら変わっていない。ただ、沙漠特有の紅柳（タマリスク）だけが群生しているから、この駅名が付いたらしい。柳園南駅から敦煌まで123キロ、自動車でも2時間ほど掛かった。ほぼ東京から沼津までの距離が、「最寄り駅」の語感を狂おしくさせる。日本の感覚では、沼津駅は東京駅の「最寄り駅」では絶対ない。途中、湖があると思つて東方を見たら、蜃気楼だとのこと。その周辺には人骨が散乱しているそう、沙漠の旅の過酷さを思つた。

これとそっくり同じ状況が1500年前に実在したかどうかは定かではない。また、これを「イラン・タジク系の薄味食文化と漢民族の激辛料理の葛藤」と云う図式に還元する前に、シルクロードの食文化伝播に於ける仏教の役割にも配慮する必要がある。つまり、大乘仏教はインド系の激辛食文化を運んできたか否かである。しかし、敦煌の激辛料理の起源が何であるにせよ、イラン・タジク系の食文化が敦煌周辺で強烈にブロックされて居ると云う事実は、案外歴史を遡るのではないだろうか。イラン人・タジク人に見ればウルムチでもトウルファンでもなく、敦煌からが異郷である。

チベット仏教の仏像

2017年8月13日。昨晩から黄砂が到来したそう、敦煌上空に靄が掛かっている。南方にある筈の祁連山脈も、今日は見えない。黄砂が舞っている分だけ太陽が遮られており、敦煌の気温は30℃を超えていない。「南方への道を行くと、3日でチベットのラサに着く」と教えられたので、地図で調べたら青海省を丸々突っ

切ってチベット高原へ攀じ登るトラックルートであった。敦煌と言えば、筆者にとっては西域のイメージが強いが、チベットとも切っても切れない関係にあるようである。

最初に敦煌博物館に到着し、明日からの調査に備えて予備知識を仕入れた。唐代7〜8世紀には、敦煌周辺の徙化郷にソグド人集落があり、ゾロアスター教拜火神殿もあったとされている。もちろん、今では跡形もない。2015年9月に、当時の奈良県立橿原考古学研究所の所長だった菅谷文則先生に同行してウルムチを訪れた際は井上靖や司馬遼太郎の通訳として敦煌を旅した話しを承ったものだった。あれを再現してここに採録できれば随分と面白い話しも拾えたのだが、覚えているのは「井上靖氏は人見知りでパーティーの席上ではフツと居なくなってしまうので困った」とか、「司馬遼太郎氏は、ずっと喋ってはかりなので、通訳する身としては逆の意味で困ったなどといったゴシップばかりである。いつか本格的にお話しを承ろうと思っていたものの、幾許もなくして病床に伏せられ、2019年6月に千古の人となられた。

また、意外なことに、敦煌博物館ではチベッ

ト仏教の仏像のコレクションが充実していた。文化大革命当時、チベット仏教の仏像は大量にチベットから運び出されて中国本土で鑄潰されたのだが、その搬出経路になったのが敦煌なのだそうである。その際、ラマ僧たちが二束三文で叩き売って旅費に当てた一部の仏像が、今では文化財として敦煌博物館に飾られるようになったとのこと。

因みに、敦煌とチベットとの密接な関係を見聞するにつれて、上記の古代イランの世界地図の中で、敢えて「中国・チベット」が一括されている理由も了解できた。日本から眺めた場合、中国本土が手前にありその西南隅にチベット高原が広がっているのであって、両者は別物と認識される。しかし、往古のイラン人やソグド人の感覚では、ゲートシティである敦煌で中国文化とチベット文化が並存している以上、これらを混同しても止むを得ない。

「華戎友好」

その後、敦煌から西北へ約80キロのゴビ灘の中にある玉門関を目指した。ここは、敦煌から西

南へ約70キロの陽関と共に前漢の武帝の時代（紀元前1世紀）に置かれた（漢民族から見た場合の）西域への関門である。

遺跡の上って西方を見渡せば、一面のゴビ灘と天山山脈。ただ、ここにあった「華戎友好」という看板には、ちよつとした考古学的遺物でも発見したような感懐を抱いた。「戎」と云えば疑いも無く「西戎」の意味で、「華」と云えば漢民族の意味である。ここには明確な上下関係があるだろう。現代の「西戎」が何を指すのかは定かではないが、漢民族以外がここを訪れたら、あまり良い気持ちはしれないと思う。尤も、シルクロード全盛時代にこのような看板があつても、イラン人・タジク人には多分読めなかつただろうが。



あおき・たけし
1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』(刀水書房)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)など著書多数。



敦煌の小方盤城遺址



敦煌の中島敬介先生